



**表紙解説** 淀川の改修工事は、オランダ人技師デレーケ氏の指導によって明治7年開始され、堤防の増強、悪水の排除、水路維持及び大阪港の水深確保が図られた。しかし、洪水による堤防の欠壊破堤が続いたため、明治30年、洪水防禦を主体とした淀川改良工事が開始され、43年完成した。その後、大正6年及び昭和28年に大洪水があり、改修が行なわれたが、昭和46年に河川審議会の議を経て流量規模を1/200とした淀川水系工事実施基本計画が策定され、これに基づいて工事が進められている。

<b>目次</b>	
この一年を省みて	2
最近の土木工事現場の紹介	3
人物紹介	5
自然景観と土木構造物	6
座談会：われわれの支部を考える	8
学生会員の欄	10
アンケート集計結果の報告	11
広報：こんなことをしています	12
編集後記	12

## この一年を省みて

土木学会関西支部 支部長 柳瀬 珠郎

土木学会関西支部は創設以来45年を経て現在では支部会員6千名を擁する名実ともに学会の大きな柱となつてまいつたのであります。この輝やかなしい歴史と伝統のある支部の長としての過去一年間をふりかえつてみて、支部のためにこれと云つて何のお役にも立たなかつたことに内心誠に慚愧たるものを感じている次第であります。

しかしこの間に支部がその活動を続けてゆく上にいろいろの面で現代的な問題に直面し、この解決を迫られて日夜努力しておられる支部幹事諸氏をはじめとして役員諸氏や支部事務局職員の真摯な姿が深く印象づけられたのであります。これらの現代的な問題の中でも特に土木工学と人間生活の調和の問題などは最近とみにやかましく取り上げられています。複雑多岐にわたるこれらの問題は如何に至難なものであらうとも一日も早く解決の道を見出してゆく地道な努力が必要であらうと考えられるのであります。

幸いにして昨年暮創刊いたしました“支部だより”がこれらの問題についても会員の討論の場となり、また会員相互間や会員と役員の間意志疎通をはかる場となつて問題の解決と支部活動の方向づけの一助ともなればこれに過ぐるものはないと考えられるものであります。

当支部では学術講演会をはじめとして数々の行事が行われていますが、これらの行事についても、諸先輩が常に努力をほらわれて時代の先取りをしてこられた貴重な伝統を守つて、その企画も時流に沿つた適切なものとしてゆかねばならないと考えられます。現代の科学技術が人間生活に及ばず影響には計り知れないものがありますが、さきにも述べた通り土木工学もまた例外ではなく、自然環境、社会環境の保全と土木技術の調和を実際に即して考えてゆかなければならないと思ひます。会員のみなさんとともにこうした問題に微力を注いでまいりたいと思ひております。

“支部だより”創刊号では主としてこれまでの支部活動の動静と最近の関西における代表的工事などについて御紹介いたしました。今回は新らしく「関西支部のあり方」についての座談会あるいは学生会員の声などをとりあげ、また創刊号と同時にお願いしたアンケートの集計を収録して御参考に供することといたしました。今後はさらに幅広く会員の声の場、討論の場として“支部だより”が活用されることを期待するものであります。

最後にこの一年間支部運営あるいは行事企画等、支部活動に御尽力をいただきました多くの方々から御礼を申し上げますと共に、土木学会関西支部が今後ますます発展してゆくことを心から祈るものであります。

# 最近の土木工事現場の紹介

## 大阪港における埋立事業

(大阪市港湾局提供)

南港埋立は、背後都市圏の生産および消費に必要な物資の海上輸送の拠点として、コンテナ埠頭やフェリー埠頭を含めた内外貨合わせて94バースの近代港湾を整備するほか、これら埠頭背後には大幅な流通関連用地をとり、複合ターミナルをはじめ食品、自動車、建設資材など西日本における流通センターを計画しております。また埋立中央部には人口4万人が、大公園や野鳥公園に囲まれた緑豊かな生活環境を享受できる新しい町づくりを進めております。南港埋立事業は昭和33年に着工し、総計画面積 920haのうち現在約40%の竣工をみております。完成時にはこれらの各施設から発生する交通量は約13万台/日で、地域外とは幹線道路で有機的に結ばれるよう計画しております。

北港事業は、廃棄物の最終埋立処分のための約209haの処分地を造成するものであります。事業費は約250億円で、昭和47～49年の間に、水域汚染などの公害防止および埋立終了後の高

度な土地利用を考慮した施工が行なわれます。処分地には、都市廃棄物および公共事業の建設廃材など約2,500万 $m^3$ を昭和48～55年の間に受入れます。(写真-1)

## 阪神流通センター建設事業

(兵庫県土木部提供)

中国縦貫道建設に伴ってみられる内陸部との情報・物資の流通のためと、昭和55年には約320万人の人口と6億4千万トンの物資の流通が予想されるこの地域に拠点を求め、中国縦貫道神戸北 I.C. 周辺の西宮市山口町に約86ha、160億円の事業費で、業務別に整理された土地利用計画にもとづく流通センター建設計画が昭和51年度完成を目的に実施中であります。昭和46年1月より用地買収に入ると同時に造成工事に着手し、本年3月末には50%を終っております。業務団地造成事業として法律指定をうけ、17.7haのトラックターミナル、9.4haの倉庫、21.7haの卸商業団地、9.4haの生鮮食料品集配センター、7.8haの花<sup>か</sup>卉<sup>き</sup>団地、1.6haの公益的施設、5.0haの公園緑地が予定されております。

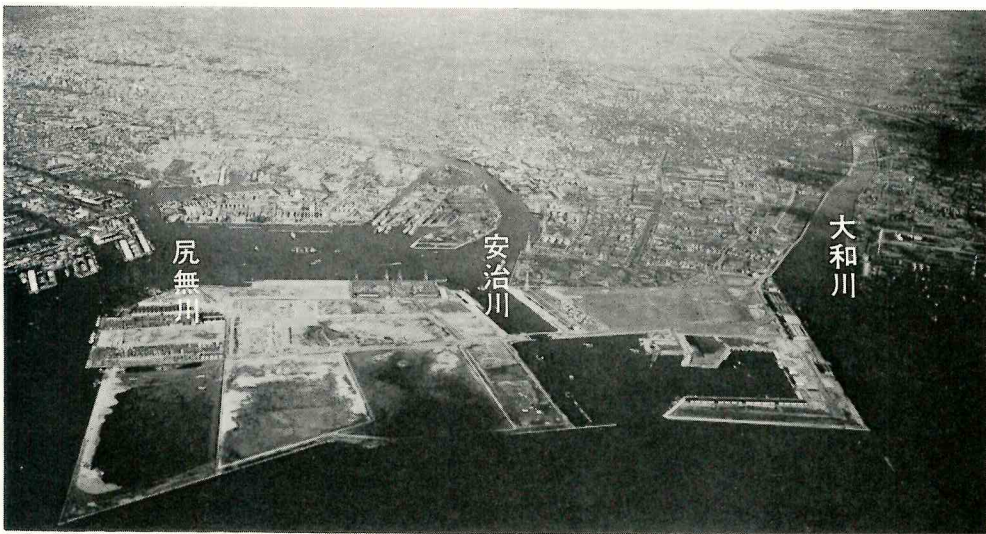


写真-1 大阪港の埋立

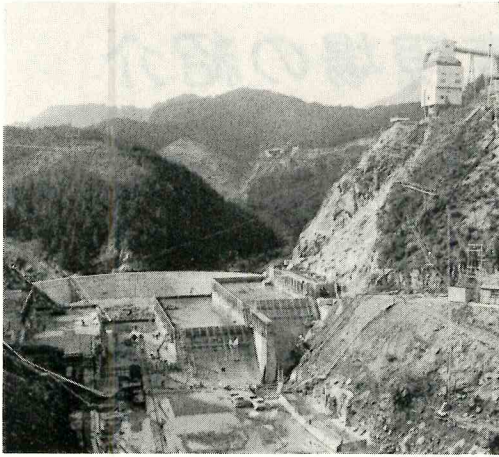


写真-2 室生ダム

### 室生ダム建設事業

(奥村組提供)

淀川水系改修基本計画の一翼を担う木津川上流総合開発事業に基づいて、名張川支川の宇陀川に昭和49年春の完工を目指して施工中であります。淀川の洪水調節および阪神地方の水需要の充足を主眼とするこの開発計画は、高山ダム、青蓮寺ダム、比奈和ダムと本ダムから成っていて、宇陀川にあっては洪水調節のほか、開発化の早い大和盆地への給水と、下流沿岸の不特定かんがい用水を確保する多目的重力式コンクリートダム（堤高63.5m、堤頂長175m、堤体積約15万 $\text{m}^3$ ）で昭和47年8月に本体のコンクリート打ちに入っております。（写真-2）

### 流域下水道建設事業

(大阪府土木部提供)

私達はかつて大気、水、土壌などは無限の浄化能力を持っていると思い込んで「煙突は高くすれば害はない」「汚水は1メートル流れたらきれいになる」「生命あるものは大地に帰る」と受継いできました。ところが生産や消費活動が広範囲で大規模になってくると、「光化学スモッグ」「死の川」「カドミ・PCBなどの土壌汚染」といわれる社会的公害が、ひどい環境破壊となって現れてきました。下水道に関しては、

従来市町村単位の規模で行なわれてきたが、この現況を広域的な観点から府県レベルで流域ごとの整備を目指し、大阪府では昭和40年より全国にさきがけて着手しました。

写真-3の鴻池処理場の特筆すべきものは、処理場から発生する二次公害の防止に留意し、汚泥焼却炉にいたるまでの主要機器類はすべて屋内に配し、処理過程を工業用テレビとコンピューターによる中央集中管理を行なっております。環境整備にも力を入れ、処理室屋上にまで緑地公園を設け、将来は住民に開放するとともに、処理場から出る放流水を汙布洗浄水、消泡水、ポンプシール水、塩素希釈水、排ガス洗浄水としての再利用をはかるなど、豊かな水資源への転換利用を研究中であります。

下水道事業の推進によって、浸水の解消、生活環境の改善と高く評価されるが、建設にあたって処理場周辺の住民には、下水道整備による彼等をふくめた広域的な便益より、彼等の所有地の地価が下がるのではないかと、2次公害は発生しないか、工事中に不便はないかを中心とした狭い地域の注文が多い。しかしながら、高次元の立場から大阪府は昭和60年を目標に府下の全市街地について下水道の完備を目指しております。（写真-3）



写真-3 鴻池下水処理場

## 人物紹介



大阪府土木部  
都市河川課  
主幹

吉田 喜七郎

### ○あなたのご家族について？

昭和34年に結婚して以来子供がないので、今でも女房との二人暮らしです。共に白髪が目立つようになってきましたが、気楽な毎日を送っています。「子供がなくて淋しいですね」とよくいわれますが、もともといないのでそれほど感じません。

### ○あなたの趣味は？

旅行、登山、ハイキング、ゴルフ、囲碁等、時にはポルノ映画の観賞も、またルノワールの絵が大変好きです。

### ○今一番したいことは？

昭和45年に6カ月間、約20カ国を旅行しましたが、今度はキャンピングカーで心ゆくまで世界見聞旅行をしてみたいです。やはりヨーロッパに一番魅力を感じます。

### ○週休二日制について？

大賛成。日本人は少し働き過ぎです。問題もあるでしょうが早期実施が先決。年をとってからはレジャーも楽しめませんからね。

### ○レジャーについて？

これからは週休二日制、労働時間の短縮などで、余暇の利用に関心が集ってまいります。そのための諸施設の整備が今から必要です。余暇といえばパチンコ、麻雀、昼寝はもう古いです。さしずめ公営ゴルフ場を沢山つくって欲しいです。ゴルフもかなり大衆化しましたからね。

### ○大阪に一番欲しいものは？

欧米には緑に恵まれた大変美しい都市が多い。ましてや都市の美観を損う歩道橋など殆んどみられません。街には噴水があり、広場があります。大阪にも人の憩えるしゃれた広場が手

近かに欲しいものです。

### ○日頃あなたの信条としていることは？

何事につけても調和のとれた姿は大変美しいものです。このため常にこれを求めて事にあたるようにしています。世界平和も究極はこの精神に発するかと思います。

### ○今までにスリルを感じたことは？

戦乱のため観光客の少なかったカイロでのこと。世界最大のピラミッドの奥深く、薄暗い灯りのもとで白衣をまとった老案内者にチップを強要されたとき。

### ○これからの土木技術者に？

これからは土木技術者も美しい国づくりをするため芸術的センスの向上が必要です。麻雀もよいですが時には美術館で名画の鑑賞などしてみても。また、常に洗練されたアイディアマンであることも大切です。

### ○土木技術者としての抱負は？

「ポスト万国博」の最大のプロジェクトは大阪湾の総合開発であるといわれていますが、いまだにその構想すら具体化していません。場当たり的な無秩序な開発を防止するためにも一日も早く計画を策定する必要があります。私は昭和44年に大阪湾の淡水化を中心とした総合開発構想（大阪府海外研修報告参照）を提案しましたが、やはり技術者としてその構想の実現が夢であります。それは淀川の余剰水を大阪湾に設ける大規模なバルブ状の貯水池に貯溜するものであり、あわせて港湾施設の整備、大阪湾横断及び環状道路の建設、水面をも含めたレクリエーション空間の造成、水産業の復活、廃棄物処分地、新空港用地、住宅用地の確保などをはかるものであります。白砂青松の浜辺のもとヨットが走り、水泳のできる一大レジャーセンターを大阪湾にとりもどす日も夢ではありません。いずれにしても国家的大事業であり、高度の政治的判断が必要とされますが、地元の土木学会関西支部がこの問題に真正面から取組まれてはいるかがなものでしょうか。同様の計画がすでにオランダ、香港では実現しており、イギリス、アメリカでも検討が続けられております。



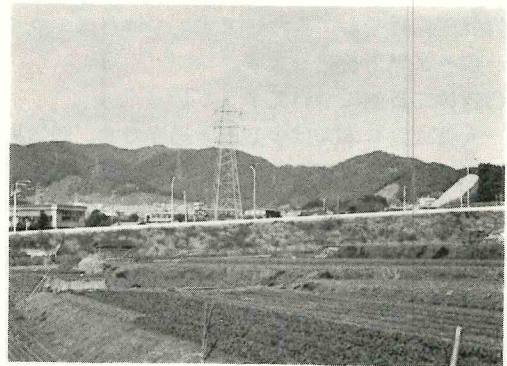
〔写真-1〕 ション城 (左) と高速道路

近年土木工事が年ごとに盛んになり、工事量は増加しているが、最近では環境破壊に対する批判もだんだんきびしくなってきました。大気、河川の汚染、そう音、振動等の公害に対する住民パワーもだんだん強力になり、世間の関心も高まっています。しかしながら無秩序な開発により、野山の緑が失われ、自然の景観の破壊が進んで行く点については世間の批判は今一步という感があります。

河川、大気の汚染、そう音、振動による生活環境の破壊は人体に対する影響が大であり、生命の危険ささえもひき起すものであるが、山々の緑がうばわれ、無残に切り取られた山はだかみにくい姿をさらけ出しても、人身に直接の害は無く、住民にとってそれほど身にせまる問題として受けとられないことがその一つの理由かも知れません。

我々が住んでいる関西地区には京都、奈良という日本の二大古都があり、その歴史的景観、風土の保全には他のどの地区よりも細かい神経を使う必要があります。先日高松塚古墳の発見により、地下にうずもれた文化遺産の保存に対する関心が深まって来たのはこの点で非常によろこばしいことでもあります。

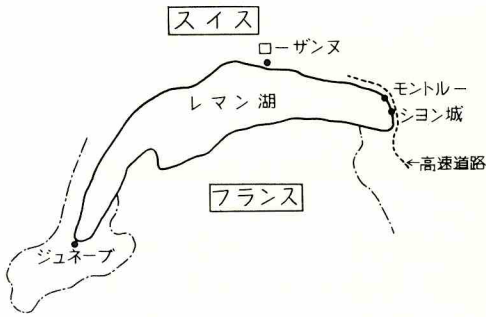
しかし京都の近辺においても開発による自然景観の破壊はすでに進んでおり、写真に見られるごとく、宅地開発によって切りとられた山はだが、みにくい姿をさらしている所があらこちらに見られるようになっていきます。〔写真2〕



〔写真-2〕 名神高速道路山科付近

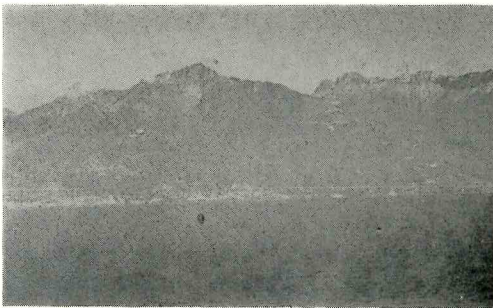
一度破壊された自然は二度と元どおりにはならず、何とか以前と同じようにするにも数百年の年月を要するものであり、開発にあたって自然の保護には一層きびしい態度が必要であります。

このような問題に対する一例として、スイスのレマン湖の東岸に接して建設されているアウ



トバーンの例を紹介してみたいと思います。

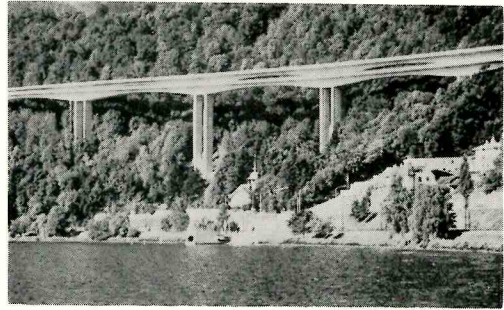
レマン湖というところは湖岸に、ジュネーブ、ローザンヌ、モンテルー等の都市がありスイスのみならずフランスにも接しているスイス第一の大きな湖であり、この湖岸に高速道路を建設するにあたり自然景観の保護には非常に神経が使われました。〔写真3〕



〔写真-3〕 レマン湖岸遠景

通常ならば湖に沿ったせまい平地にすでに道路と鉄道がある所に更に高速道路を作るとなれば、斜面を切り取って道路を建設するのがごく普通のやり方でありましょう。この場合切りとられた山はだが湖の景観をそこなうのは明白です。またこの道路が通る下の湖の中には詩人バイロンが歌ったシヨンの城があり、(写真1の左下に見えている)、歴史的にも由緒ある所です。

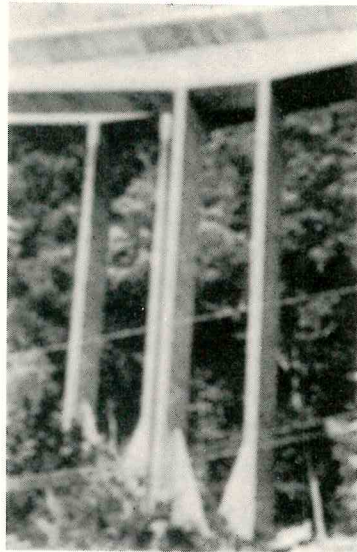
ここに建設された高速道路は景観保護の点より、斜面を切りとらずに写真のごとく高い橋脚の上に立った高架橋として実現されたのであるが、相並んだうすい二本の橋脚、そこから左右にゆるやかについたハンチのくり返しによる軽



〔写真-4〕 高速道路近景

快なりズム、上下段ちがいになった車線が作る二本の線のアクセント等この高速道路は、レマン湖の景観保全のみにとどまらず、レマン湖岸に新しい景観をつくり出した、とまで言えるのではないのでしょうか。

このようにすぐれた計画のもとに行なわれた開発というものは、決して環境を破壊するものではなく、現状の保存という点からさらに一歩進んで新しい自然景観を創造することができるという事をこの例は示しているのではないのでしょうか。



〔写真-5〕 橋脚詳細

我々日本の土木技術者もより良き環境を創り出すために、このような問題についても一層の努力をつみ重ねる必要があると思います。

<文責：内藤 隆>

## 座談会

# われわれの支部を考える

アンケートの結果が問うものは何か？ 会員の意識の動向は……支部の現状と今後のあり方を探る

出席(50音順) 岡 尚平(大阪府)・岡村宏一(阪工大)・川谷充郎(阪大院)・川本 清(阪市大院)・河原畑良弘(奥村組)・絹川 治(公成建設)・後藤尚男(京大)・坂上隆正(事務局)・白石成人(京大)・中井 博(阪市大)・村岡浩爾(阪大：紙上参加)・柳田保男(建コン協)・柳瀬珠郎(近畿日本鉄道)・山家 馨(ピース)

と き：昭和47年2月17日 ところ：土木学会関西支部

本号の11ページにアンケートの結果の報告がありますが、現場に密着した行事企画、年次学術講演会のあり方、支部を会員同志のより広い交流の場に——などについての要望があります。一方、技術の多様化にともなう多くの情報があり、また選択度の多い社会への移行など——土木技術者もまた時代の流れに直面しております。このようなすう勢のなかで、地域社会における支部はどう対処していくべきか、が問われる段階になってきているといえましょう。今回の座談会は、目下支部運営に直接関与されている役員、ならびに“2号”の編集に各界より御集まりを願っている委員の方々のなかから出席をいただき、進行上、話題を<私の見た支部><支部行事のあり方>の2点に分け、それぞれ個人の立場で自由に発言していただきました。この記事はそれを集約したものであります。

### <私の見た支部>

現場にいても情報はあるのですが、画一的な演習のくり返しが多い。刺戟物が要る。新技術を導入し、それにメスを入れるにも現場だけではできない。やはり各界の連繋のもとに企画されるべきですよ。そこにユニークさが要ると思う。ただ現場でも、立場によって技術面での格差があり、講習会などのレベルについても多様化が欲しいのだが。

社会に巣立つ者として、公害問題などを含めた社会環境の変動がでてきて、今迄の流れが正しかったのかという疑問があり、そこで学会が示唆を与えてくれるかということに莫然とした期待がある。単に技術交流の場のみならず、社会的な意義に対するものに……。

支部の変遷を見ると、技術革新があり、一方通行だったかも知れぬがその指標となるべきだという対応があった。ところが2,3年前から価値観の多元化がでてきたわけです。これらの時

代に、支部としてどういうことをやるかということをもう一度考えなおすべきでしょうね。ただそこには現実の規制がある。運営組織や支部財政の安定化など……無理には限度がある。その意味でもバランスのとれた会員相互の心の触れ合いが必要です。今迄の企画の整理もある程度必要じゃないか？ 1つの軌道をばく進している感もありますね。コーナーに来ているという認識に立つべきじゃないですか。

学会という組織をなぜ必要とするか？ 今、生活のまわりにある意味での否定があるし、自分の力が限られている。個人々々が自由な立場で話し合い、考えることのできる場として学会を認識したい。権威というものに安定性を認めると同時に、ある種の疑問と批判がでてくる。それでは学会は何をするべきか？ 会員の意識の動向を洗ってみる必要がある、とみるんです。

学会という名前にあまりとらわれ過ぎるんじゃないか？ 土木業会の技術者の集団という

見地に立てば、その権威主義もおのずから解消されるのでは……そういったことでもう少し幅広い対象をとらえて地域性をだしていくという面があってよいと思う。

### <支部行事のあり方>

学会ともなればアカデミックでなければならぬという視点がありますね。一本旗を掲げておく必要もある。しかし支部全体のなかで、学問そのものがすべてではないという人も多いんじゃないですか。関西町人的感覚の方も強いですよ。行事の多様化が要ると思いますね。また現場では、騒音とか棄注などの実際的なものがある。依頼するわけですが相手の言葉が違う。だからディレクターになれと……広い範囲を実践するプレーが必要になる。高度な専門技術をいかにかみくだいた形で会員にフィードバックするか、ということです。



左から柳瀬、絹川、河原畑、坂上、白石、岡村の各氏

講習会も短編集的なところもあるんですね。講師の構成範囲や期限の問題もある。今の実行組織一幹事分担制では、頼む一方でなかなか条件がつけられない。調査研究をやって、それを講習会に還元する方法なども考えてみては……。幹事の負担も大きい。企画の構成をある程度分散して、会員にアットランダムに参加してもらえれば多様化、あるいは交流の場の拡大があるのではないかと。

アカデミズムと現場とのかかわりにカギがあると思うんですが……。いつの時代でも確立されるまでは学問、価値などと呼ばれにくい。現在ある程度確立されたものにとらわれ過ぎてい

るんじゃないかという反省が必要だ。一体何がこれからの問題か、という提起の意味で現場の声を煮詰める……つまり、そこに柔軟性が必要だし、自由な交流の場がなければならない、ということです。

公害問題にしても、これが土木技術者の当面している最大の問題だろう。土木の分野のみに限らず、もっと視野を広くして社会生活につながる包括的なとらえ方が要りますな。

問題設定だけでなく、学会としても答を出すという努力をしなければいかん。



左から中井、後藤、山家、岡、川本、川谷の各氏

年次学術講演会についてもかなり問題がでてくる。件数の増加、いっばなしの討議なし。情報源としても、これはそんなもんかいなあ程度以上には出ないんじゃないか？

開催日についても検討の余地があるんだが、問題は内容ですよ。審査でしぼるとか、シンポジュームの形態なども考えられる。

機会均等の見方もある。日本人の感覚かも知れぬが審査に困る。学生に対する教育的見地もあるんじゃないか。未完成な点もあるが、という……。

そうは思いませんねえ。なるほど教育的なものについては同感です。ただ、それが直ちに学会の場にはならんということですよ。

学生にとっても講演会があるから出さねばならないというのには疑問がある。発表してもそれが終りでなく、それから再出発というもの……もっと示唆的であって欲しいですね。見学会などもただ見るだけでなく、もっと現場の方々と語り合うとか……。→

## 学生会員の欄

第2回刊行することになりました“支部だより”におきまして、特に、我々若い会員の心のふれあいを深め、若々しい気風を吹き込むために、今回より“学生会員の欄”を設けることになりました。そこで今回は学生Cさんの御意見を採り上げてみました。

記者：従来の支部についてどう思われますか？

C：僕は、会員の特典が学会誌年間予約購読だけであるように思います。もちろん、支部では、講習会・見学会・映画会などを催されていることは知っております。しかし、従来、どれほどのアピールがなされたかは知りませんが、支部はかなり一方通行的な存在だったと思います。この欄にしましても、学生会員の動向が無視できなくなったので、その意見を採り上げてやろうということに設けられたように思えます。

記者：具体的にはどういったことですか？

C：例えば、講習会について言いますと、そのテーマに興味がわかなかつたり、費用が高かったり、時期が合わなかつたりして、参加の意欲が薄れてしまうのです。それに参加しても、何か終始一方的なものに感じられ、質疑応答や素朴な疑問をぶつけることができないように思われます。まるで、支部は“偉い人々のための支部”であり、僕達は傍観者の立場に立たされている感じがするのです。学会誌についても言えることですが、内容がアカデミックなものばかり取り扱っており、専門家以外の人には残念ながら理解できないでしょうといった中世ヨーロッパのギルド的な要素が多分にありそうに思われます。

記者：そういう訳で行事への学生の参加が少ないのですか？

C：もちろん、現代特有の学生気質を持った我々も反省しなければならぬのですが……。

→年次学術講演会については、アンケートの50%が現状でよいという現実もある。現状でもよいというのなら、研究成果の意義を広報するのも1つの案だ。また講演会の場を借りて、学会が土木技術に対する姿勢の現れとしてとりあげた行事などの紹介と構想を披露する。その上で会員の意見を具体的に反映するのもよいのではないか。変えるというのなら抜本的な姿勢が要る。これは他の行事についてもいえると思えますね。変えることによって恐らく賛否がでるだ

記者：支部としては、あなた方の行事への積極的な参加を望んでいるのですが、どのように改善すべきだと考えられますか？

C：それらの行事内容が学生の要求と一致していないと思います。

最近、自然破壊防止・環境保全が叫ばれる中で、ただ単なる金字塔の羅列だけに終わらないために、土木技術者の行動の哲学を考えるシンポジウム等があっても良いのではないのでしょうか。時代と共に変わる具体的な要求を学生だけでなく若手技術者の誰もが持っていると思います。それを敏感に採り上げた行事を企画・計画する必要があると思います。それには役員構成を改めるべきで、企画・計画担当の幹事に学生・若手技術者の代表も加えたらどうでしょうか。そして、直接的、かつ日常的に我々の意見・要求を採り上げて、それに応えることのできる役員構成を造り上げることを提案します。

記者：それでは、あなた方自身の参加方法をどのように考えられますか。

C：激しく移り変わる社会状況の中で、土木を学び、これから技術者として出発しようとしている我々学生は、どのように土木行政や工事に携わっていけば良いのかといった不安を感じざるをえないのです。また個々の大学において、狭い視野でなくできる限り広い見方で自分自身を見つめてみたいのです。でも毎日の変わりばえのしない生活からなかなか具体化しません。かえって他の大学の人達と交わることによって、日々の怠惰な生き方を反省させられ、また別な研究指向をも示されると思うのです。更に大学を卒業して社会に出てから独自に学ぼうとする時、身近に共に啓発し合って学べる場を持ちたいと望んでいます。大学の枠を越えて集まり、若い社会に出た人も加えて研究し合う場を造りたいと思っています。

以上、いろいろと述べましたが、大多数の学生会員の方々も同意見ではないかと思えます。

記者：今日はどうもありがとうございました。

ろう。しかしそこに大きな意味での試行錯誤が生ずるんじゃないですか。

やはり多くの会員が参加することによって何かがでてくる。不参加では何もでない。おそらくそのようになるまで“支部だより”が1つの役割を持つんじゃないか。いろいろな人の意見と感覚が、これらの編集にも必要だ。試行錯誤の時代ともいわれているが、その過程——ライフヒストリー——というか……それが“支部だより”にでてくるといいですね。

## アンケート集計結果の報告

“支部だより”創刊号とともに、関西支部のあり方についてのアンケートを御願ひ致しましたが、その結果1,035名の会員より御回答をいただきました。この会員数は関西在住の会員の約19%にあたり、数多くの貴重な御意見をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。

アンケートは別表のように、5問についてそれぞれ撰択回答事項を設け、会員に撰んでいただき、その結果を集計致しました。この表より明らかなように大多数の会員が関西支部に関心をもっておられることがわかりました(設問1)。また講習会については基礎的な知識の必要性とともに新しく開発されたものへの関心が強く、今後もこうした点に十分な配慮がなされなければならないと思われる。(設問3) 見学会、懇話会等積極的に行うべきであります。約2割の会員が批判的な御意見であることは、行事企画の上で十分に反省し、新しい試みも考えられるべきものと思われま。す。(設問4) “支部だより”については8割強の会員がこれを新しい支部と会員の連繫として支持されているものと思われま。す。(設問5) 最後に年次学術講演会については22%の全員が改めるべきであると考えられ、25%の全員が意見表明を保留されており、土木学会関西支部の最も重要な行事の一つである学術講演会のあり方について根本的に検討しなければならないと考えられま。す。(設問2)

以上簡単に、設問についての結果を報告致しましたが、自由意見の欄について報告したいと思います。この欄には色々の御意見がのべられておりその全てを紹

介することができませんが、関西支部の行事を企画する上で2つの代表的意見がのべられております。その一つは会員の大多数は実務に直接関係している技術者であり、この意味で、現場に直結した講習会、見学会、懇話会等が企画されるべきであるという意見であり、いま一つは土木技術者として自然保護、環境保全、あるいは現代における社会的人間的問題を現実のものとしてとらえ、学会としての立場を明らかにすべきであるという意見であります。支部行事はこうした会員の考え方を具体的に反映するものでなければなりませんので、明年度の商議員会あるいは幹事会で十分に検討されることを期待しております。

この外自由意見としては土木学会誌、行事の開催日時についての意見が多くありました。土木学会誌については学術的な形を全うすべきであるとの意見と、会員の実態を考え、より現実的な問題、あるいは多くの会員が関心をもつテーマをとり挙げるべきであるとの意見があり、後者の意見がより多く出されております。配布時期を早めること、会費を安くすべきであるとの意見もありましたが、これらは関西支部独自で処理しえないものであるため、土木学会本部に問題提起していかなければならないと考えられま。す。行事の開催日時については休日あるいは夕方開催の意向も示されておりますが、これらは支部財政、あるいは講習会、講演会などにおける会場確保など現実的問題で、かなり困難となっております。“支部だより”については多くの会員の賛同の意見が出されておりますが、特に若手技術者あるいは学生会員の交流の場としての意義を全うするよう努力されなければならないと思われま。す。

<文責：白石 成人>

### アンケート 調査結果

解答者数 1,035 名 (回収率 19.2%)

1. 関西支部の行事企画についてどのように思われますか。

常に関心がある (55%)	時々行事案内を見る (42%)	わからない 無回答 (1%)
		関心がない(2%)

2. 関西支部の年次学術講演会をどのように思われますか。

いまのままでよい (50%)	改めるべきである (22%)	わからない (25%)
		無回答 (2%)

3. 関西支部の講習会をどのように思われますか。

いまのままでよい (29%)	基礎的なものを望む (24%)	最近の知識をもっと入れるべきである (43%)	わからない (8%)
			無回答 (1%)

4. 関西支部の見学会、懇話会等をどのように思われますか。

もっと数多く開くべきである (31%)	いまのままでよい (41%)	おもしろくない (8%)	わからない (18%)
			無回答 (2%)

5. 関西支部の“支部だより”をどのように考えますか。

よい (35%)	普通 (51%)	悪い (4%)	わからない (8%)
			無回答 (2%)

## 広 報

こんなことを しています。

### 行 事

昭和47年度の行事は、講習会を5回、講演会3回、研究会2回、懇話会2回、学生見学会2回、学生映画会1回と一般映画会1回それに、毎年必ず1回行なわれる支部年次学術講演会を開きました。

昭和48年度も長期計画を立てて、会員のお役に立つものを催す予定です。今のところ交通体系研究会、立地・土地利用研究会、トンネル調査研究会、地すべり講習会、下水道・水質講習会・地域計画講習会などが候補に上っています。

### 総 会

総会は無味乾燥なものですが、支部の活動を理解願うためにも、せいぜい参加して下さい。総会后、講演を予定しています。

### 調査研究

昭和41年5月から、関西支部で騒音振動委員会が研究を進めて参りました。新たに、今年3

月から京都大学岩佐義朗教授を委員長として、都市水文委員会を作りました。

都市化が進んでいる地域での降雨特性、流出特性、内水機構と内水処理、河道内の問題、防災管理システムなどについて研究します。

### 委託研究

鉄道橋の下部構造健全度診断法をきめるため、京都大学後藤尚男教授を委員長として、研究を始めました。

### 規定類の整備

支部規定、支部内規は古くからありましたが、役員会、委員会、従業員などに関するものがなかったので、46年度、47年度中に大半を制定しました。残りを48年度に完成する予定です。

### 予 算

毎年活動が拡大しますから予算も毎年増大しています。

昭和46年度、1,400万円、47年度2,030万円、48年度は2,600万円を予定しています。この内、支部会員が本部へ納付した会費の還付金は本年約400万円です。

## 編 集 後 記

“支部だより”2号は、今年初旬より編集業務を始め、当初の計画に従い、今度、会員の皆様にお届けすることになりました。今回の第2号では現在の関西支部幹事以外に会員の中から若干名の方に編集発行に参画していただきましたが、それに加えて学生会員の参加もえました。今年2月より作業を開始しましたが、今回の支部だよりでは次の点が特に問題点として議論されてきました。すなわち、(i)支部企画と会員との交流、(ii)前回のアンケートに対する集計結果と支部の今後のあり方、(iii)学生会員の参加の問題、(iv)支部財政の問題などがありますが、創刊号に対する会員の皆様の御支持と貴重な御意見は今後の支部運営の上で十分に生かされていくものと考

えております。多くの会員の方々が望まれております「現場に密着した支部の行事企画」と「生活環境に対する技術的問題認識」が我々にとって今最も重要なものになっていると思われれます。これをこれからの行事企画の一つの基礎として、会員と支部とのより密着した交流の場を考えて行きたいと希望するものであります。今回の“支部だより”では人物紹介、特集欄等を新しく設けましたが、各職場班の御協力を御願ひ致しますとともに、土木工学の様々の形での現代的問題をこの“支部だより”で取り上げてまいりたいと存じますので、会員の皆様の御支援を御願ひしたいと存じます。次号は昭和48年度の関西支部役員の下で編集発行が行われますが11月発行の予定になりますので、御意見等を土木学会関西支部宛にお寄せいただきたいと存じます。

<文責：白石 成人>

支部だより No. 2 昭和48年5月10日発行

編集担当：大家康熙、岡尚平、岡村宏一、川谷充郎、川本清、河原畑良弘、後藤尚男、鈴木伸彦、内藤隆、長沢保紀、中谷忠男、春名攻、白石成人(主査)

土木学会関西支部

大阪市東区船場中央2-2

船場センタービル4号館409号

電話 (06)271-6686

印刷所 中西印刷株式会社